

高等学 校

平成 29 年度

教育研究員研究報告書

商 業

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	1
III	研究仮説	2
IV	研究方法	3
V	研究内容	5
VI	研究の成果	2 3
VII	今後の課題	2 4

研究主題	新しい時代を生き抜くための「思考力、判断力、表現力等」を育む授業改善
-------------	---

I 研究主題設定の理由

平成 28 年 12 月、中央教育審議会は、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（以下、「答申」）」を公表した。この答申には、「2030 年の社会と、そして更にその先の豊かな未来において、一人一人の子供たちが、自分の価値を認識するとともに、相手の価値を尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、よりよい人生とよりよい社会を築いていくために、教育課程を通じて初等中等教育が果たすべき役割を示すことを意図している。」とある。また、変化が激しく将来の予測が困難な時代にあっても、子供たちが自信をもって自分の人生を切り拓き、よりよい社会を創り出していくことができるよう、必要な力を確実に育てていくことが期待されており、「主体的・対話的で深い学び」が重要であることが示されている。

これらの学びを実現するため、商業教育においては、地域や産業界等と連携した実験・実習などの実践的、体験的な学習活動を更に充実し、アクティブ・ラーニングの三つの視点（「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学び」）から、これらの学習活動を再確認しながら授業改善に取り組むことが求められている。

平成 29 年 2 月、東京都教育委員会では、「都立高校改革推進計画・新実施計画」（平成 28 年 2 月）において示された、ビジネスを実地に学ぶ商業教育への改革に向けた具体的な取組方策などを、「商業教育検討委員会報告書」として取りまとめた。

これまでの商業科においては、検定資格等の取得に向けた取組を積極的に行ってきており、知識・技術の定着を目的とした教授型の授業が重視されてきた。一方で、総合実践、販売実習など生徒が主体的に活動し、実践力を育む授業も従前から行われてきている。こうした授業により、知識と技術に加え実践力を養い、社会で即戦力と成り得る人材を輩出してきた。しかし、これまでの授業では、生徒が習得した知識を活用して課題を解決する機会が不足しており、実践力を育む授業が行われているにもかかわらず、新学習指導要領で求める「思考力」「判断力」「表現力」等を十分に育成しているとは言えない。また、教員には、生徒の主体的・対話的な授業が知識・技術の定着に繋がるという理解が不足している。そこで、学習した知識や技術を活用する場面を授業に取り入れ、確かな定着を更に図ることで、思考力、判断力、表現力等を育むことができる。また、そのことが生徒の学習意欲を引き出し、自発的な学習行動を促すのではないかと考え、研究主題を「新しい時代を生き抜くための『思考力、判断力、表現力等』を育む授業改善」とした。

II 研究の視点

1 昨年度の研究報告書から

平成 28 年度教育研究員研究報告書（高等学校・商業）においては、「商業科目におけるアクティブ・ラーニングの視点に基づいた授業で活用する共通のルーブリック評価表」を作成した。各単元の冒頭において、ルーブリック表により生徒に科目の目標を明示することで、

生徒が思考する場面など学びの過程を可視化できることが分かった。一方で、研究の課題として、評価方法を妥当性及び信頼性のあるものとして確立させる必要があるとした。そのため、各教科・領域における個々の単元や授業を通して生徒に身に付けさせる力を明確に設定した上で、学習活動を構築する。そして、その力がどの程度身に付いているかを把握し、その後の授業や学習の改善に生かす必要があることとした。

2 新しい時代に求められる「思考力、判断力、表現力等」

答申において、育成を目指す資質・能力の要素のうち、思考、判断、表現の過程として、「物事の中から問題を見だし、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題発見・解決につなげていく過程」、「精査した情報を基に自分の考えを形成し、文章や発話によって表現したり、目的や場面、状況等に応じて互いの考えを適切に伝え合い、多様な考えを理解したり、集団としての考えを形成したりしていく過程」、「思いや考えを基に構想し、意味や価値を創造していく過程」としている。そこで、商業部会では、新しい時代に求められる「思考力、判断力、表現力等」について、思考力を「ビジネスの場面における様々な課題に対して、知識を活用してその解決方法を見いだす力」、判断力を「収集した情報を整理・分析し、課題解決のために必要な情報及び最適な手法を選択する力」、表現力を「ビジネスにおける協働的な取り組みのために、自身の思いや考えを他者に適切に伝える力」と定義した。新しい時代を生き抜くための「思考力、判断力、表現力等」を育む授業改善を実現するためには、講義型の授業を実施後、ルーブリック評価を活用することで、生徒自身に現時点でどの程度の理解ができているか客観的に把握させ、課題意識をもたせることができる。また、教員も生徒の取組状況を把握することで、授業改善に役立てることができる。

Ⅲ 研究仮説

- 1 本研究では、研究仮説を「学習した知識・技術を活用する授業を行った上で、単元等のまとめにおいてルーブリック評価を行うことで、生徒が思考する場面などの学びの過程を可視化することで、思考力、判断力、表現力等を育むことができる」と設定した。具体的には、下記のとおりである。
 - (1) 検定の資格取得を目指した知識・技術の習得を主な目的とする授業でも、学習した知識・技術を活用することに取り組むことにより、知識・技術の定着に加え、思考力、判断力、表現力等を育むことができる。
 - (2) 学習した知識・技術を活用する授業への改善によって、生徒自らが学ぶ姿勢を導き出すことができる。
 - (3) 全ての商業科目においても、思考力、判断力、表現力等を育む授業を意図的・計画的に組み込むことで、新しい時代を生き抜くための学力を身に付けさせることができる。

Ⅳ 研究方法

- 1 各単元において、知識・技術を活用する授業において、作成した「ルーブリック評価表」により、評価・検証を行う。平成 28 年度教育研究員研究報告書（高等学校・商業）4 ページの「共通ルーブリック評価表」を参考にし、具体的な内容については、下記のとおりである。
 - (1) 授業で知識・技術を習得した後、それらを活用する単元ごとに討論やグループワーク、パフォーマンス課題などアクティブ・ラーニングの視点に立った授業を行うための思考力、判断力、表現力等を育む。
 - (2) 平成 28 年度教育研究員が作成した「共通のルーブリック評価表」（別表）を基に、科目ごとにルーブリック評価表を作成し、思考力、判断力、表現力等の状況を評価するとともに授業の評価・検証を行う。
 - ア 単元ごとにルーブリック評価表を作成し、生徒の思考力、判断力、表現力等とともに、授業の有用性を評価する。
 - イ 小テストなどを課し、授業改善の実施前と実施後を比較し、知識の定着や関連付けの達成度を検証する。
 - ウ 自己評価表、相互評価表、教員による観察結果、授業後のアンケート結果などから、学習意欲の向上や自発的な学習行動の有無を検証する。
 - エ 研究員が商業の各分野において検証授業を行い、既習の知識・技術を活用し、知識・技術の定着と同時に、思考力、判断力、表現力等を育むことができたかを検証する。

(別表) 平成 28 年度教育研究員作成「共通のルーブリック評価表」

商業科目におけるアクティブ・ラーニングの視点に基づいた授業で活用する

共通のルーブリック評価表

達成度		レベル A	レベル B 【履修目標】	レベル C	レベル D 【到達目標】	レベル E
身に付けさせたい力						
①	現状を分析し目的や課題を明らかにする力	与えられたテーマから問題を設定し、その問題を多面的に捉え、取り上げた理由など、根拠に基づいて述べることができる。	与えられたテーマから問題を設定し、その問題を取り上げた理由など、根拠に基づいて述べることができる。	与えられたテーマから問題を設定し、その問題を取り上げた理由などが述べることもできる。	与えられたテーマから問題を設定しているが、その問題を取り上げた理由などの内容が十分ではない。	与えられたテーマから問題を設定しているが、その問題を取り上げた理由などを述べるできない。
②	課題の解決に向けたプロセスに応じて計画する力	具体的な計画に則して実行できる。	具体的な計画を立て、自ら行うべき内容を明らかにできる。	課題の解決に向けたプロセスに応じて、大まかな計画を立てることができる。	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし、計画を立てようとしている。	課題の解決に向けたプロセスを明らかにすることができない。
③	新しい価値を生み出す力	自ら新たな視点での課題解決策を提案できる。	自ら根拠に基づいた課題解決策を提案できる。	自ら指示された範囲の課題解決策を提案できる。	他人のアドバイスがあれば指示された範囲の課題解決策を提案できる。	指示された範囲の課題解決策を提案できない。
④	自分の意見を分かりやすく伝える力	相手の理解を深めることを意識しながら、事例等を挙げ、自分の意見を述べるることができる。	相手が興味を引くように工夫しながら自分の意見を述べることができる。	相手が理解できるように配慮し、自分の意見を述べるることができる。	相手のことを意識して、自分の意見を述べることができる。	伝えたい内容を相手に伝えることができない。
⑤	相手の意見を丁寧に聴く力	相手が振り返り、考えるための質問をすることができる。	相手の意見に則した質問をすることができる。	相手の意見を記録し整理することで、理解を深めようすることができる。	相手の意見を理解しようとしている。	相手の意見を理解しようとしていない。
⑥	意見の違いを理解する力	違う意見に対し、比較・検討することで新たな解決策を提案できる。	意見の違いを理解し、分類することで関連性を特定できる。	意見の違いの理由を理解するために、質問するなどして、意見の違いを裏付けることができる。	意見の違いを理解しようとしている。	意見の違いを理解しようとしていない。

V 研究内容

1 研究構想図

全体テーマ 「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善」

高校部会テーマ

「新しい時代に求められる『思考力、判断力、表現力等』を高めるための授業改善」

各教科等における「新しい時代に求められる『思考力、判断力、表現力等』とは

思考力：ビジネスの場面における様々な課題に対して、知識を活用してその解決方法を見いだす力

判断力：収集した情報を整理・分析し、課題解決のために必要な情報及び最適な手法を選択する力

表現力：ビジネスにおける協働的な取組のために、自身の思いや考えを他者に適切に伝える力

高校部会テーマにおける現状と課題

【現状】商業科では検定試験への取組を積極的に行っており、知識・技術の定着を目的とした教授型の授業が重視されてきた。一方で、総合実践、販売実習など生徒が主体的に活動し、実践力を育む授業も従前から行われてきている。こうした授業により、知識と技術に加え実践力を養い、社会で即戦力と成り得る人材を輩出してきた。

【課題】実践力を育む授業が行われているにもかかわらず、生徒が習得した知識を活用して課題を解決する機会が不足しており、新学習指導要領で求める「思考力、判断力、表現力等」を十分に育成しているとは言えない。また、教員には、生徒の主体的・対話的な授業が知識・技術の定着に繋がるという理解が不足している。

【テーマ設定のための着眼点】商業科の各科目において、学習した知識や技術を活用する場面に授業に取り入れることで、思考力、判断力、表現力等を育みながら、知識・技術の確かな定着を図ることが可能となり、生徒の学習意欲を引き出し、自発的な学習行動を促す。

高等学校商業部会主題

新しい時代を生き抜くための「思考力、判断力、表現力等」を育む授業改善

仮説

- 1 検定の資格取得を目指した知識・技術の習得を主な目的とする授業でも、学習した知識・技術を活用する内容を取り入れることにより、知識・技術の定着に加え、思考力、判断力、表現力等を育むことができる。
- 2 学習した知識・技術を活用する授業への改善によって、生徒自らが学ぶ姿勢を導き出すことができる。
- 3 商業科の全ての科目において、思考力、判断力、表現力等を育む授業を意図的・計画的に組み込むことで、新しい時代を生き抜くための学力を身に付けさせることができる。

具体的方策

- 1 授業で知識・技術を習得した後、単元ごとに討論やグループワーク、パフォーマンス課題などアクティブラーニングの視点に立った授業を行い、知識・技術を活用させる。
- 2 平成28年度教育研究員が作成した「共通のルーブリック評価表」を基に、単元ごとにルーブリック評価表を作成し、生徒の思考力、判断力、表現力等を評価する。

検証方法

- 1 単元ごとにルーブリック評価表を作成し、生徒の思考力、判断力、表現力等を評価するとともに授業の有用性を検証する。
- 2 小テストなどにより検証授業の前後を比較し、知識の定着や関連付けの達成度を検証する。
- 3 自己評価表、相互評価表、教員による観察、授業後のアンケートの結果から、学習意欲の向上や自発的な学習行動の有無を検証する。

2 検証授業

実践事例 I

教科名	商業	科目名	簿記	学年	第1学年
-----	----	-----	----	----	------

(1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

ア 単元名 第3編決算（その1）

イ 使用教材 「新簿記」実教出版株式会社

本クラスは1学年習熟度別の基礎クラス（全商3級コース）14名である。本校では2学期から基礎クラス（3級）と発展クラス（2級）に分かれ授業を行ってきた。基礎クラスでは、演習問題の反復練習などを行って知識の定着を図っている。

そこで、今回の授業では知識の活用を目的とし「日常の取引を適切に記帳し、財務諸表を作成する」をテーマにボードゲームを活用する。二人1組でグループとなり会社を運営、日常の様々な取引を適切に記帳し、財務諸表を作成するという一連の流れを体験させ、知識の深化を図り、思考力、判断力、表現力等を高めることを意識して働きかける。

(2) 単元（題材）の目標

- ・ 経営活動における簿記の目的や役割を認識し、財務諸表を作成する。
- ・ 作成した財務諸表から、自社の財政状態や経営成績を簡潔に考察する。

(3) 単元の評価規準

ア 知識・技術	イ 思考、判断、表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
① 日常の取引を適切に記帳することができる。 ② 帳簿を締め切り、財務諸表を作成することができる。	① 取引から適切な勘定科目を用いて記帳することができる。 ② 利益はどのように発生するか考えて、取引を行うことができる。 ③ 財務諸表から自社の財政状態や経営成績を考察できる。	① グループ内で協働し、与えられた課題を解決することができる。 ② 円滑な作業が行えるように取り組むことができる。

(4) 単元（題材）の指導と評価の計画（4時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法など)
		ア	イ	ウ	
第1・2時	・ ボードゲームを活用し、企業ごとに取引を適切に処理する。 (仕訳帳・総勘定元帳)	●	●	●	ア①〔帳簿〕 適切な勘定科目を用いて記帳処理が行える。 イ①〔帳簿・観察〕 様々な取引に関して、適切な勘定科目を考察することができる。 イ②〔観察〕 適切に借り入れを行ったり、商品の売買を行ったりすることができる。 ウ①、ウ②〔観察〕 グループで協働し、円滑な取引と記帳を行っている。

第3時 (本時)	<ul style="list-style-type: none"> 前時に作成した帳簿を締め切り、財務諸表を作成する。 (仕訳帳・総勘定元帳の締切、合計残高試算表・損益計算書・貸借対照表の作成) 財務諸表から、自社の財政状態や経営成績を簡潔に考察する。 	●	●	●	ア②、ウ①、ウ②〔帳簿・財務諸表〕 適切な決算処理を行い、財務諸表を作成することができる。 イ③〔ワークシート〕 作成した財務諸表を読み取り、自社の財政状態や経営成績について考察できる。
第4時	<ul style="list-style-type: none"> 他社の財務諸表を観察し、自社と比較しながら、それぞれの取引について振り返る。 財務諸表や帳簿の役割について考察する。 		●	●	イ③、ウ①〔ワークシート・発表〕 自分の意見や考えを他者に適切に伝えることができる。

(5) 本時（全4時間中の3時間目）

ア 本時の目標

- 経営活動における簿記の目的や役割を認識し、財務諸表を作成する。
- 作成した財務諸表をみて、自社の財政状態や経営成績を考察する。

イ 仮説に基づく本時のねらい

- (ア) 簿記の授業においてもこれまでに学習した知識・技術を活用する授業を取り入れることで、思考力、判断力、表現力等を育む。
- (イ) 簿記の授業においてもルーブリック評価表を取り入れたたり、パフォーマンス課題を改善したりすることで、生徒の自ら学ぶ姿勢を導き出す。
- (ウ) 簿記の授業においても協働的で意図的・計画的なパフォーマンス課題を提供することで新しい時代を生き抜く力を身に付けさせる。

ウ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
5分	<ul style="list-style-type: none"> ルーブリック評価表、ワークシートの説明 作業（合計残高試算表の作成・帳簿の締め切り・財務諸表の作成）の手順を確認 	<ul style="list-style-type: none"> 評価規準及び到達目標を伝え、生徒の学習活動が活発になるように伝える。 	
40分	<ul style="list-style-type: none"> 合計残高試算表の作成 帳簿の締切 繰越試算表の作成 損益計算書・貸借対照表の作成 	<ul style="list-style-type: none"> 分からないことは参考資料、教科書、ワークブックなどを見たり、聞いたり、調べたりして構わないと伝え、適宜助言を行う。 	ア②、ウ①、ウ②〔帳簿・財務諸表〕 適切な決算処理を行い、財務諸表を作成することができる。
5分	<ul style="list-style-type: none"> 学習活動の振り返り 	<ul style="list-style-type: none"> 振り返りが可視化できるように、リフレクションシートに記入させる。 ここでは、自社の財務諸表をみて思ったことを簡潔に書くだけで、分析など深堀はしない。 	イ③〔ワークシート〕 作成した財務諸表を読み取り、自社の財政状態や経営成績について考察できる。

(6) 本時の振り返り

ア 仮説1の検証

簿記の授業では、検定試験に合格はできるものの、授業で培った知識・技術を発揮したり、活用したりする場面が少ないという現状がある。

学習した知識・技術を活用する授業となったかという点について、仕訳帳と総勘定元帳へ

の記帳は、日常的に練習しており、貸借対照表や損益計算書の作成も繰り返し行ってきた。しかし、記帳を行うタイミングで「どのように書くのか」という質問があった。このことから、見慣れた解答用紙と問題文でないところが生徒にとっては“違うもの”として認識されると確信した。また、日頃練習している仕訳の問題より簡潔であったが、“問題文”としてパターン化されていないため、記帳作業は混乱した。これは、貸借対照表や損益計算書の作成についても同様であった。また、同一日付に2～3の異なる現金取引（消耗品購入・仕入・売上）を行う際、「諸口」の表記を用いて一つにまとめて処理する生徒がおり、生徒は知識を活用しているものの、適切に反映できない事例があった。これは、日頃取り組む問題文は同一日に複数の取引を記帳する機会が少ないことなどから起因しているものと考えられる。つまり、反復練習によって知識が定着したと考えていても、実際には正しく活用できていないことが分かった。

本授業では、ボードゲームを用いた教材を作成して授業を行った。金額のみならず取引の内容もグループごとに異なるため、決算の際に、仕訳帳や総勘定元帳への記帳の誤りを各グループ内で発見しなければならず、基礎クラスでは難易度はやや高めであった。本授業を通して、生徒からは「働くこと」や「記帳」についての多くの発言があり、「仕訳間違えると大変なんだね」「綺麗に書けなかったから読めないよ」「(雇用・採用の面から)どんな従業員を雇うかで会社に影響がある」というような発言があった。

知識・技術の定着と同時に、思考力、判断力、表現力等を育むことができたかという点については、前述の内容を踏まえ、今回の授業では生徒に様々な気づきを与えることができた。さらに、より実務的な取引を取り入れ、交際費・福利厚生費・会議費などの勘定科目を活用させたことで、記帳の技術だけではなく社会で今後活躍していくための思考力・判断力の育成に有効といえる（仮説1の立証）。

イ 仮説2の検証

財務諸表の作成に当たっては、ルーブリック評価表を用いて到達目標を伝えた。このルーブリック評価表は、昨年度の共通ルーブリック評価表をベースに、より平易な表現で活用した。これは、ルーブリック評価表による本クラスの生徒への負担を軽減し、生徒と教員との評価の齟齬を避けるためである。

(参考資料) 本時に応用したルーブリック評価表

身に 付けさせたい力 達成度	レベルA	レベルB 【履修目標・到達目標】	レベルC	レベルD	レベルE
課題の解決に向けたプロセスに応じて計画する力 ②	決算の計画を自分でたてて損益計算書と貸借対照表を作成できる。	損益計算書と貸借対照表を作成できる。	繰越試算表まで作成できる。	帳簿の締め切りができる。	合計残高試算表が作成できる。
自分の意見を分かりやすく伝える力 ④	言葉以外のものも使いながら、相手が理解できるように配慮し、自分の意見や考えを言える。	相手の反応をみながら、相手が理解できるように配慮し、自分の意見や考えを言える。	相手の目を見て自分から相手に自分の意見や考えを言える。	自分から、相手に自分の意見や考えを言える。	相手に助けをもらい、自分の意見や考えを言える。

生徒自らが学ぶ姿勢を導き出すことができたかという点について、今回の検証授業で特筆すべき点はあらかじめ用意した解答がないというところにある。本時の内容のみでは全国商業高等学校協会主催簿記実務検定試験3級の範囲は網羅できていないが、今回の学習を通して生徒は他者と協働し、自ら課題を解決することができた。

ルーブリック評価表によって、生徒には、こちらが何をしてほしいか、何をできるようになってほしいかを明確に伝えることができたことから、課題解決に関する項目では全員がレベルBと評価し、課題をやり遂げることができた。一方、自分の意見を伝える項目では、こちらの意図に関係なく、自己肯定感が低い生徒はレベルCと自己評価していた。このような生徒にはフィードバックを適切に行うことで、改善が見られる。また、「帳簿が合わないので自宅で考えてきてもよいか」というような生徒や、放課後、自主的に帳簿を清書する生徒もおり、主体的な活動を促進することにも大いにつながった。その一方で、総勘定元帳の転記に誤りがあり、その訂正に消極的な生徒も少数ではあるが存在した。しかしながら、課題に取り組まないということにはなかった。これまで基礎的な学習になかなか積極的に取り組めない生徒も見受けられたが、今回の授業で学んだことに自信をもち、簿記の授業を前向きに捉える姿勢へ変化していた(仮説2の立証)。

ウ 仮説3の検証

新しい時代を生き抜くための学力を身に付けることができたかという点について、本授業では、新しい時代を生き抜く力を「他者と協働し、知識を活用して、解答のない課題を解決できる力」とした。

仮説1・2の結果からも分かるようにクラスの現状に合わせたパフォーマンス課題とルーブリック評価表による目標の明確化によって、全ての生徒が解答のない課題に対して協働的に活動できた(仮説3の立証)。

【生徒の声】(授業中の発言)

- ・ 最初はゲームだと思ったけど、だんだんと本当のビジネスについて分かってきたような気がする。
- ・ 簿記の仕組みとか、必要性が分かった。
- ・ 少し難しかったけど、いつものプリントとかワークよりも、今回の課題のほうが仕事では必要なことだと思った。いつもの問題練習の意味も分かった。
- ・ 難しい内容でもペアの人や先生と相談しながら答えを出すことができてうれしかった。
- ・ 借金の取引に抵抗があったけど、お金を借りることも利益につながるということが分かった。

エ 課題

簿記の授業においても協働的で意図的・計画的なパフォーマンス課題を提供することは可能であった。生徒のコメントにもあるように借入金に対する価値観の変化など、普段の授業では考えないことにも思考が及んでいる。

ルーブリック評価表の活用では、平易な表現にしたため生徒には明確なねらいを伝えるこ

ルーブリック評価の結果(生徒)

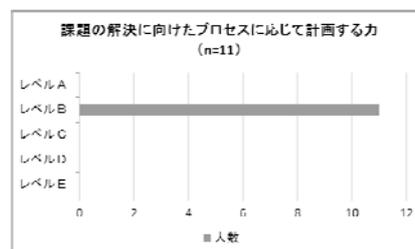


図1 ルーブリック評価表身に付けさせたい力②の分布

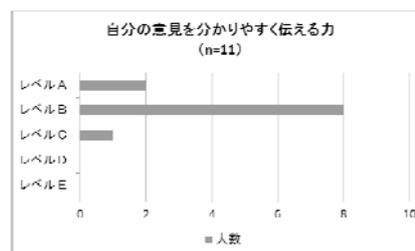


図2 ルーブリック評価表身に付けさせたい力④の分布

とができ、特に混乱はなかった。特に留意した点は、どのような力を身に付けさせるかを明確にした点、生徒が分かる言葉で表現した点である。今回は5段階で活用したが、クラスの状態をみて4段階や3段階にすることにより、教員と生徒双方の負担を軽減することができる。

今回は、仕訳帳と総勘定元帳のみの記帳で、財務諸表の作成を行ったが、簿記のみならず、ビジネスに対する更なる深い学びにつながると確信している。

課題としては、本クラスは習熟度別の授業であり、人数も少ない。通常のクラス授業で同様のパフォーマンス課題を課すためには、今回得られた生徒の反応や成果を基に、新たなパフォーマンス課題を考える必要がある。

また、課題を課すタイミングを誤ると効果が得られない可能性もはらんでおり、単元の範囲の指導終了時に行う必要がある。

実践事例Ⅱ

教科名	商業	科目名	情報応用 (学校設定科目)	学年	第3学年
-----	----	-----	------------------	----	------

(1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

ア 単元名 コンピュータシステム

イ 使用教材 ITパスポート合格教本、ジャンク品ノートPC 4台

(2) 単元（題材）の目標

- ・ コンピュータに関するハードウェアとOSの構成や動作についての知識と技術を習得させ、コンピュータシステムの設計、構築、運用、保守などに活用する能力と態度を育む。

(3) 単元の評価規準

ア 知識・技術	イ 思考、判断、表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
① コンピュータシステムの、基本的なハードウェアとソフトウェアの知識を身に付けている。 ② コンピュータが正常に動作するために必要な、ソフトウェアや各周辺機器の保守管理に関する知識・技術を身に付けている。	① コンピュータシステムを構築するソフトウェアや各機器の役割を認識し、最適な動作環境を考えたり整えることができる。 ② 課題解決のためのプロセスを計画し、レポートにまとめることができる。	① コンピュータシステムに関する知識と技術に興味をもち、学習しようとする意欲をもっている。 ② グループ学習において積極的にコミュニケーションを図り、意見交換や課題解決に向けた活動に意欲的に参加している。

(4) 単元（題材）の指導と評価の計画（5時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法など)
		ア	イ	ウ	

第1時	<ul style="list-style-type: none"> 実際の基板や各部品に触れながら、その名称と役割を確認する。 ワークシートを用いて、確認したハードディスクや使用教室の周辺機器配置図、各機器の役割についてレポートを作成する。 	●	●	●	<ul style="list-style-type: none"> 基本的なハードウェアの知識を身に付けている。(ア①レポート、定期考査) 分かりやすく見やすいレポートを工夫して作成している。(イ①ウ①レポート)
第2・3時	<ul style="list-style-type: none"> グループ内でテキストの単元「コンピュータシステム」の内容を分担して、詳しく調査し、内容を精査して発表用にまとめる。 グループ毎に発表を行い、相手の発表を受けて知識を共有する。 	●	●	●	<ul style="list-style-type: none"> テキスト内の重要な項目を理解し、分かりやすく伝えるために工夫することができる。(イ①ウ①②観察、発表内容) コンピュータシステムに関する知識を身に付けている。(ア①発表、定期考査)
第4・5時(本時)	<ul style="list-style-type: none"> 課題「起動しないPCを起動させてみよう」を課し、現状の分析(根拠と仮説)をレポートに書き出す。(個人) 各個人で書き出した仮説と根拠をグループ間で検討し、最終的な課題解決のためのプロセスを計画し、実行する。(グループ) 一連の活動をレポートにまとめ、発表する。(グループ・個人) 	●	●	●	<ul style="list-style-type: none"> 与えられた課題について積極的に考え、解決策を見付けるために調査したり、論拠のある仮説を立てることができる。(ア①②イ①ウ①観察、レポート) グループのメンバーと協力し、課題解決のための手順を計画することができる。(イ①②ウ①②観察、レポート) 学習内容を論理的に記述し、分かりやすく伝えることができる。(イ②ウ②観察・発表・レポート)

(5) 本時(全5時間中の4・5時間目)

ア 本時の目標

- (ア) コンピュータシステムに関する知識を活用し、論拠をもって仮説を立て、課題解決に向けたプロセスを計画し、実行する。
- (イ) グループ活動を通してコミュニケーション能力を養い、意見交換の姿勢、効果的な意思の伝達について考え、実行する。
- (ウ) コンピュータシステムの正常な稼働のために必要な環境について知り、保守管理の基本的な知識を身に付ける。

イ 仮説に基づく本時のねらい

- (ア) 授業開始時にルーブリック評価表とチェックシートを提示し、本時の活動によって身に付けさせるべき知識・技術と望ましい学習態度を意識させ、効果的な学習活動を促す。
- (イ) 課題解決をテーマとしたパフォーマンス課題を活用し、生徒の主体的に学ぶ姿勢を導き、知識・技術の定着と思考力、判断力、表現力等を養う。

ウ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入 10分	活動内容の説明とパフォーマンス課題の提示 <ul style="list-style-type: none"> ルーブリック評価表、チェックシート、自己評価表、相互評価表、レポート記入用紙の配布と説明 	<ul style="list-style-type: none"> 到達目標を明確にし、生徒の学習活動の方向性を示す ルーブリック評価表の内容と活用方について具体的に説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> 目標と評価について確認し、到達目標を目指して活動しようとしている。(ウ①観察)
展開 75分	個人の活動(10分) <ul style="list-style-type: none"> 根拠のある仮説を立て、レポートに記述する。 必要に応じて調査する。 	机間指導 <ul style="list-style-type: none"> 生徒から質問があっても原則として考える方向性のみを示す。 	<ul style="list-style-type: none"> 与えられた課題に対し、積極的に解決方法を探っている。(ウ①観察)

	<p>グループ活動1 (50分)</p> <ul style="list-style-type: none"> 個人で立てた仮説と論拠を基に、グループで課題解決方法について検討する。 検討した内容を基に、課題解決に向けた作業計画を立て、作業計画書に記入し、チェックを受ける。 検討した作業手順に従って作業を実行する。 課題が完全に解決するまで、検討・計画・実行を繰り返す。 	<p>机間指導</p> <ul style="list-style-type: none"> 必要に応じて声掛けを行い、生徒の自主的な活動を促し、見守る。 作業計画を確認し、非効率な計画には再検討を指示する。 危険のないよう注意して見守る。 グループの全員が作業にあたるよう、作業者が偏っている場面があれば、必要に応じて声掛けを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> グループのメンバーとコミュニケーションを図り、課題解決に努めている。(イ①②ウ②観察) 効率的で妥当な作業計画を立案することができる。(ア②イ②レポート)
	<p>グループ活動2 (15分)</p> <ul style="list-style-type: none"> 仮説と根拠、計画した作業手順と実行結果を、発表用にまとめる。 グループ毎、仮説、根拠、作業計画、実行結果、まとめ又は新たな仮説を発表する。 相互評価シートへ記入を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 「伝わりやすさ」を意識した発表となるよう助言する。 	<ul style="list-style-type: none"> 仮説、根拠、作業手順、実行結果を論理的にまとめることができる。(ア②イ①②観察、レポート) 発表方法を考え工夫している。(イ①ウ①観察)
まとめ 15分	<p>コンピュータシステムについてまとめ(一斉指導)</p> <ul style="list-style-type: none"> 一連の活動を振り返り、コンピュータシステムにおけるハードウェアやOSの構成、役割を確認する。 <p>レポートまとめ(個人)</p> <ul style="list-style-type: none"> 相互評価表交換 自己評価表、チェックシート、相互評価表を基に、自身の学習活動を振り返り、個人レポートを完成させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 本単元のポイントを振り返り、これまで学習した知識の確認と、学習活動のポイントをまとめる。 評価の意義を再確認し、生徒が正しい自己評価を行い、次の学習の姿勢につながるよう評価をフィードバックさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> コンピュータが正常に動作するために必要な、コンピュータや周辺機器、OSに関する知識・技術を身に付けている。(ア②イ①②レポート、定期考査)

(6) 本時の振り返り

本科目はITパスポート取得を目標とした学校設定科目であり、年間2単位を課題研究3単位と組み合わせることを条件に開講されている。本時では、「動かないPCを起動させよう」というパフォーマンス課題を課し、コンピュータが正常に動作するためのハードウェアおよびソフトウェアの環境について考え、知識を活用して課題を解決する実習を行った。用意したPCのうち1台は正常に稼働するものであり、これは実習の際の参考用とした。他3台は、事前に本体の電源ユニットのコネクタを外し、電源が供給されないという障害を加えたものである。さらに、OSにパスワードをかけ、サインインできない状態にしておく。生徒ははじめに、観察によって電源が供給されていないことを発見し、電源アダプターから電源ユニットまでのテストと修繕の計画を立てた。ハードウェア的な問題の解決には、多くの時間を費やすことなく全てのグループが迅速に解決することができた。しかし、パスワードに関する課題の解決には試行錯誤を繰り返し、グループ内で活発な議論が行われ、他グループの動向を探り、グループを超えた議論も行われていた。インターネットや書籍、自分が過去に記したノートを読み返し、全員で協力して課題解決を行った。

ア 仮説1の評価・検証(自己評価シート、相互評価シート、アンケート)

授業実践後に行った、単元全体を振り返る自己評価シート、相互評価シート、アンケートにより、生徒の変容に関する検証を行った。思考活動については、7名全員が教授型の一斉授業と比較して、活発に行われたと回答し、先生の説明を聞く授業よりも楽しかったと答えている。また、「実際に見たり活動したものは記憶が長く残っていますか」の問いに関しても、ほとんどの生徒が肯定しており、「ハードウェアに関する知識が深まった」、「やる気が出た」、

「充実した授業時間を過ごすことができた」など、授業に関する肯定的な回答を得ることができた。

一方で、課題解決型の実習に関して非常に肯定的な回答をした生徒でも、そのほかのグループでの学習活動や発表といった活動に関して、「グループで活動するのではなく、一人で学習したかった」、「資格取得に直結する答案練習をもっと行いたかった」と答えた生徒や、「発表はあまり好きではないので、できればやりたくなかった」と答えた生徒が1名ずつ存在している。しかし、苦手だと感じながらも活動には懸命に取り組む様子が見られ、グループの生徒の励ましやサポートを受け、他の生徒と同様に発表を行うことができていた。達成感には繋がらないまでも、グループ活動や主体的な活動に関して否定的な回答のあった生徒の2名が、いずれも自分に身に付いたと感じる能力を、「自分からすすんで活動する積極性」と回答しており、授業に前向きに取り組む、活動した様子をうかがうことができる。

イ 仮説2の検証・評価（アンケート、自己評価シート、相互評価シート、チェックシート）

授業実践後に行ったアンケートや自己評価シート等により、生徒自らが学ぶ姿勢を導き出すことができたか否かを検証した。授業者は、課題解決や発表などといった生徒の活動の際に、最初にループリック評価表を提示し、レポート作成の際にはチェックシートで補い、自己評価表、相互評価表を用いて生徒に学ぶ姿勢を示している。このループリック評価表を活用した各評価シートについて、生徒は授業実践後に行ったアンケートの中で、全員が「役に立った」と答えている。理由は「どのように授業を受けると評価につながるのかが分かった」、「授業を受けやすかった」、「自分の目標になった」、「評価表の高い評価を目標にして頑張ることができた」などであった。これらの回答から、ループリック評価表を活用することで、生徒が自身の学習行動に関して迅速なフィードバックを行うことができ、好ましい学びの姿勢が導かれたと読み取ることができる。また、課題解決型の授業によって、「与えられた課題があったから面白かった」、「起動したときの達成感がよかった」、「PCを自作したくなった」、「分からないことをそのままにしなくなった」など、積極的に授業に取り組んだ様子や、学習活動への興味が広がった様子が見受けられた。

（参考資料）本時に応用したループリック評価表

身に 付けさせたい力	達成度	レベルA	レベルB 【履修目標】	レベルC	レベルD 【到達目標】	レベルE
取り組む姿勢 ⑤		グループ内のそれぞれの意見を理解し、提案された内容を比較検討し、新たな解決策を提案することができた。	グループ内のそれぞれの意見を理解し、課題に対する自分の考えを提案することができた。	他者の意見を理解し、自分の意見を発言することができた。	グループ活動に参加し、他者の意見を理解しようとした。	グループ活動に参加することができなかった。
原因を探る ①		原因を考えるために行動し、理由とともにレポートに二つ以上書くことができた。	原因を考えるために行動し、理由とともにレポートに一つ以上書くことができた。	原因を考えるために行動し、レポートに一つ以上書くことができた。	原因を考えるために、観察したり調べたりといった行動ができた。	原因を考えるために、何も行動できなかった。
対策を考える ②		問題の解決のための方法を具体的に挙げ、その手順を効率を考慮して計画し、実行することができた。	問題の解決のための方法を具体的に挙げ、その手順を効率を考慮して計画することができた。	問題の解決のための方法を考え、具体的に挙げることができた。	問題の解決のための方法を見付けるために、考えたり調べたりといった行動ができた。	問題の解決のための方法を見付けるための行動ができなかった。
学んだこと		与えられたテーマに対	与えられたテーマに対	与えられたテーマ	与えられたテーマに	与えられたテーマ

をまとめる ④	して学習した内容を振り返り、論理的で詳細なレポートを、分かりやすく工夫して作成することができた。	して学習した内容を振り返り、詳細なレポートを分かりやすく工夫して作成することができた。	に対して学習した内容を振り返り、詳細なレポートを作成することができた。	対して学習した内容を振り返り、レポートを作成することができた。	に対して学習した内容を振り返ることができなかった。
------------	--	---	-------------------------------------	---------------------------------	---------------------------

ウ 仮説3の検証（筆記試験）

この科目では、1学期に講義形式の一斉授業によりITパスポートの試験範囲内の知識を習得し、答案練習を行っている。その際、過去問をランダムに出題するインターネット上のサービスを活用し、毎時間毎の回答数・正答数を記録するとともに、出題分野別の正答率の分析状況についても個々の記録を保存し、知識の定着度を確認している。これによると、5月から7月にかけて徐々に知識の定着が深まり、夏季休業日前には総合平均正答率53.1%ほどであったが、夏季休業日後の9月には平均33%に落ち込んだ。その後若干正答率に復活は見られたが、生徒の取組状況からも活気が失われ、答案練習になかなか集中できない者、なかなか向上しない自分の点数にやる気が減退した者などが見受けられるようになった。

このような状況を鑑み、10月上旬より、授業の形態を活動型へと変更することとした。生徒には、まず決められた単元でレポートを作成させ、次にグループ単位で内容を精査し、「相手のグループに教える（伝える）」ことを目的とした発表を行わせ、生徒から生徒へ『教える』活動を繰り返させることとした。発表のスタイルは、①自分たちで考えた自由な形、②A4用紙とマジックを使ったKP法形式、③パワーポイントを活用したプレゼンテーション形式の3種類である。はじめは作成されるレポートも隙間が多く、ただ単に内容を羅列しただけのレポートもあった。しかし、授業者が優れたレポートを選び、ルーブリック評価表の観点に基づいて評価ポイントの解説を行いながら、レポートを評価して見せると、次第に様々な工夫が施され、発表の態度や発声にも改善がみられるなど、生徒はよりよいものを作成しようと努力し、そのために学習活動を行うようになっていった。

この形態の授業は、主としてITパスポートにおけるテクノロジー系分野を中心として行ったが、もともと苦手としていたこの分野の平均スコアは1学期末には35.8%にとどまっていたのに対し、2学期末には58.0%へと躍進した。時系列的な知識の定着や出題された問題の難易度に差異があったとしても、講義と答案練習のみを繰り返した筆記試験の平均スコアから、1.6倍の得点率の向上を見ることができた。また、授業実施後に行われたアンケート結果からも、生徒の学習活動が活発化し、意欲的に学習に取り組んだ様子が見受けられる。これらの検証結果から、資格取得を目的とした授業においても活動型の授業が有用であると結論付けることができる。

エ 課題

第二学期から取り入れた活動型の授業を通して、授業者が把握した課題は次のとおりである。①課題を完了する時間がグループにより異なり、未消化のまま終わってしまうグループがある。②この分野を得意とする生徒が全てをこなしてしまい、消極的な生徒や内容に苦手意識をもつ生徒は課題に取り組めないことがある。③グループ学習が苦手な生徒がいる。④グループ活

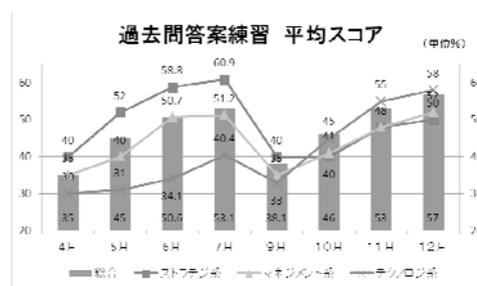


図3 平均スコアの推移

動を取り入れると試験のための勉強ができなくなるという不安感が生徒に存在する。①について、学習活動は初めはぎこちなく、活発に意見交換が行われるグループと行われないグループ、時間内に終わることができるグループとできないグループとがあった。しかし、グループ活動を繰り返すことで、次第にスムーズな活動を行うことができるようになったことから、年間を通してグループ学習を日常化し、「学び合い」の姿勢や「学び合う関係づくり」を行っていくことが必要と考える。②については、グループ全員が貢献できる活動・タスクを考えることや、与える課題によって、「リーダー」、「発表役」など一人一役の役割を与えるなどの工夫も重要と考える。本授業においては、受講する生徒の人数が少数であり、また、この科目に興味・関心の高い生徒が選択しているため、初めから生徒には意欲もあり、授業者の指導が十分に行き届く環境であったため、良好な成果を得ることができた。しかし、35名の授業であった際には、特に①、②、③の問題は顕著に表れたと予測できる。また、活動における評価が個人の成績にフィードバックされない場合においては、生徒の学ぶ姿勢を導き出す際の大きな障害となったのではないかと考えられる。そしてグループ活動において、思考訓練の量的・質的不足、討論の前提となる一般教養・知識の不足から起こる問題にも、あらかじめどのような対処をするべきか、引き続き研究が必要である。アンケートの中で発表しなかったと答えた生徒も、授業者による配慮と他の生徒からの支援によって成り立たせることができた授業であったが、通常のクラス単位授業の中で、このような生徒が複数存在していた場合には、一人の教科担当で個別に対応することは難しい。また、活動型の授業を好まない生徒や、知的好奇心が高いがゆえに講義を好む生徒に対して、このような授業を年間を通して実施することが好ましいとは思えない。したがって、講義形式の授業と活動型の授業をバランスよく組み込み、生徒の状況を的確に把握しながら、効果的な実践を行う必要がある。

実践事例Ⅲ

教科名	商業	科目名	販売実習 (学校設定科目)	学年	第3学年
-----	----	-----	------------------	----	------

(1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

- ア 単元名 文化祭実習
- イ 使用教材 なし

(2) 単元（題材）の目標

- ・ 文化祭を通じて、マーケティング系列の生徒による販売実習を行う。
- ・ 販売商品の決定、販売計画、販売促進などの活動をマーケティング手順にしたがって計画し、これらの計画が効果的に実践できたかどうかを評価・検証する。
- ・ 販売実習を通じて、販売員に必要な資質と技術を身に付けさせる。

(3) 単元の評価規準

ア 知識・技術	イ 思考、判断、表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
① 来場者のニーズに合った商品を提供するために、必要とされるマーケティングの知識を活用し、商品計画・販売計画を立てることができる。 ② 立案した商品計画や販売計画に基づいて、購買意欲を高めさせるような効果的な販売促進策を計画する。	① 来場者のニーズを満たすような販売商品を検討する。 ② 来場者の購買意欲を高めさせるような販売促進策を検討する。 ③ それぞれの顧客に応じた顧客満足を実現するために効果的な販売活動を実施する。	① 来場者のニーズを満たすために、自主的・主体的に学習に取り組む、販売実習の一連の活動において、顧客満足の実現に向けて貢献しようとする意欲や態度が見られる。

(4) 単元（題材）の指導と評価の計画（4時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法など)
		ア	イ	ウ	
第1時	<ul style="list-style-type: none"> 販売実習を行うために、売上の増加や顧客満足の実現に向けて、店舗販売を行うための必要な要素をマーケティング用語を用いてワークシートにまとめる。 	●		●	<ul style="list-style-type: none"> マーケティングの知識を活用し、「店舗販売を行うための必要な要素」をワークシートにまとめることができる。(ア①ワークシート) ワークシートの内容や文字数から販売実習の成功に向けて、主体的に学習に取り組もうとする姿勢が見られる。(ウ①ワークシート)
第2・3時 (本時)	<ul style="list-style-type: none"> 来場者の顧客満足が図られるような品揃えとなるよう、グループワークを通じて、商品計画をワークシートにまとめながら、販売商品を検討する。 各グループで検討した商品計画についてプレゼンテーションを実施し、販売商品を決定する。 	●	●	●	<ul style="list-style-type: none"> 検討した販売商品について、マーケティング用語を用いて、効果的なプレゼンテーションを行うことができる。(ア①イ①発表) 顧客満足の実現に向けて貢献しようとする意欲や態度が見られる。(ウ①観察)
第4・5時	<ul style="list-style-type: none"> 前時に決定した販売商品の効果的な販売促進策を検討し、来場者の購買意欲を高められるような広告の作成と販売活動の計画を行う。 		●	●	<ul style="list-style-type: none"> 来場者の購買意欲を高めさせるように、文字、イラスト、キャッチフレーズ、コピーを効果的に用いたPOP広告を作成することができる。(イ②作品) 作業の丁寧さや真摯に取り組む意欲や態度が見られる。(ウ①観察)
	文化祭での販売実習		●	●	<ul style="list-style-type: none"> 販売目標の達成と同時に、来場者の顧客満足に貢献しようとする姿勢がみられる。(イ③ウ①観察)
第6時	<ul style="list-style-type: none"> 文化祭での販売実習を通して、事前に立てた商品計画や販売促進策が効果的に実践できたかどうかをマーケティング用語を用いてレポートする。 	●		●	<ul style="list-style-type: none"> 本単元での一連の活動を振り返り、来場者の購買意欲を高めさせ、顧客満足の実現に向けて自主的・主体的に活動することができる。(ア①ア②ウ①レポート)

(5) 本時（全6時間中の3・4時間目）

ア 本時の目標

- (ア) これまでに学習したマーケティングに関する知識を活用し、来場者の購買意欲が高まるような販売商品を検討し、販売実習の成功に向けた商品計画や販売計画を立てることができる。
- (イ) マーケティングに関する用語を活用して、グループワークの中で計画した内容を系統立てて説明できるとともに、他者の計画のよい点を取り入れながら、来場者の顧客満足に向

かうように取り組むことができる。

イ 仮説に基づく本時のねらい

(ア) 授業開始時にルーブリック評価表を配布し、本時に身に付けるべき学習成果を意識させながら効果的な学習を促す。

(イ) 本時に行った学習活動について、自己評価を行うとともに、生徒相互で評価し、互いが望ましい姿勢で授業に取り組む態度を養う。

ウ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入 15分	<p>【前時の振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> 前時に検討した「店舗販売を行うための必要な要素」で出された意見を公表し、マーケティングに関する用語を引き出しながら確認する。 <p>【本時の学習内容の確認】(5分)</p> <ul style="list-style-type: none"> 個人の学習活動、グループワーク時の学習活動で使用するワークシートに基づき、ルーブリック評価表の内容および自己評価・相互評価の方法について確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の側からマーケティングに関する用語が引き出されるよう、質問の仕方を工夫する。 評価規準及び到達目標を明確に示し、生徒の学習活動が効果的に行われるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> マーケティングに関する様々な用語を用い、その意味について説明することができる。(ア①発問)
展開① 35分	<p>【個人の活動】(15分)</p> <ul style="list-style-type: none"> 自らが考えた販売商品とそのねらいをワークシートに記入する。 グループワークで自らが立てた販売計画を系統立てて説明できるよう準備する。 <p>【グループワーク①】(20分)</p> <ul style="list-style-type: none"> 自らが考えた販売商品や販売計画をグループで述べ合い、互いの意見を交換しながら、グループとしての販売計画を立て、販売商品を決定する。 	<ul style="list-style-type: none"> 例年の来場者を想定して、顧客のニーズが満たされる販売商品や販売計画になっているか観察する。 ワークシートの記入内容が、グループワークで系統立てた説明ができるようになってきているかを観察し、より深い思考ができるように促す。 ブレインストーミング法により活発な意見交換が行われ、グループ全員が参加して、気付いたことを言いやすい雰囲気を作られるよう机間巡視を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> マーケティングに関する基本的な知識を活用することができる。(ア①ワークシート) 自分の考えに加え、他者の意見の良い点を受け入れ、グループとしての商品計画を提案することができる。(イ①観察)
展開② 35分	<p>【グループワーク②】</p> <ul style="list-style-type: none"> グループで立てた商品計画を、クラスで説得力がある発表ができるよう準備する。 <p>【プレゼンテーション】</p> <ul style="list-style-type: none"> グループで検討した販売商品や販売計画をクラスの全体に発表し、意見を交換しながらクラスとしての商品計画をまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> グループで出された多くの意見が反映できるよう準備させる。 グループワークを観察し、それぞれのグループの状況を把握しながら、活発な意見交換ができるよう助言する。 発表ごとに講評を行い、マーケティングに関する用語の捉え方やマーケティング手順を踏まえた内容になっているか助言する。 	<ul style="list-style-type: none"> 自己、他者の意見を取り混ぜながら、顧客満足の実現に向かうよう献身的な態度で準備することができる。(ウ①観察) マーケティングに関する知識の活用やマーケティング手順を踏まえて発表を行うことができる。(イ①発表)
まとめ 15分	<p>【まとめ】</p> <ul style="list-style-type: none"> グループのメンバーが記入した相互評価表を見ながら、自身の学習に向かう姿勢を振り返る。 自己評価表に自身が行った学習活動を記入し、本時の学習活動を振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> 評価が感覚に基づくものではなく、ルーブリック評価表に示された評価規準に沿って行われるように促す。 	<ul style="list-style-type: none"> 振り返りを行い、本時の学習活動から学んだことを具体的に記入できる。(ウ①ワークシート)

(6) 本時の振り返り

生徒は、2学年の「マーケティング」において、販売活動に伴う企業が行う様々な活動について学習してきた。本科目は、マーケティングの知識を活用し、多くの機会を通じて、販売に関する知識や技術を実践するための講座である。

ア 仮説1の検証（ワークシートによる）

前時にも、「店舗販売を行うための必要な要素」について、マーケティング用語を用いてワークシートの作成を行ったが、用語の使用もまばらで、意味を正しく理解せずに使われているケースもあった。本時も同様に販売商品の決定に向けて、グループワークで交換した意見をまとめ、ワークシートに記入させたところ、レポートの内容も充実し、マーケティングに関する用語の使用数も増えた。

	使われた用語の例
前時	ニーズ、POP広告、市場調査、マーケットターゲット、クチコミ
本時	(上記に加えて)、ストアコンセプト、値ごろ、製品ミックス、標準化、多様化、非価格競争、端数価格政策、AIDAS理論、誇大広告、商品のコモデティ化、顧客満足など

このことから、過去に学習した知識・技術を活用した授業を取り入れることにより、知識の定着と同時に、思考力・判断力・表現力を育むことができたといえる。

イ 仮説2の検証（グループワークの観察、プレゼンテーション）

本時の導入時に、前時に行った「店舗販売を行うための必要な要素」について、生徒から出されたワークシートの内容を公表し、マーケティング用語の意味を確認しながら整理した。中には、昨年使用した教科書を開きながら、要点を確認する生徒もあり、さらにグループワークでは、自己の意見に加え、他者の意見の良い点を加えながら活発な意見交換が行われ、「顧客満足」とは何かについて真剣に話し合う姿が見られた。その結果、主体的に学習に取り組む意欲や態度を育むことができたといえる。

ウ 仮説3の検証

前時の「店舗販売を行うための必要な要素」について考える学習では、個による学習活動が中心であったが、本時にグループワークを取り入れることにより、活発な議論が行われた。自己と他者の意見や考え方の違いから課題を見だし、互いの知識を駆使しながら、課題の解決に向かう様子が見られた。その情熱はその後の活動にも生かされ、来場者に対して販売商品の長を訴求した販売活動が積極的に行われ、マーケティングに関する知識を有機的に結び付けた実習の場となった。

今回の一連の学習では、これまでに習得したマーケティングの知識を活用して、課題を発見し、発見した課題を探究して学びを深め、協働して解決策を見いだすプロセスで学習することができた。これら一連の学びを通じて新しい時代を生き抜くための学力を身に付けることができたといえるのではないだろうか。

エ 課題

今回の一連の学習の中で、グループワークを積極的に取り入れ、他者との協働的な学び合いの中から、課題に対する解決策を見いだす学習を行ってきた。その際のグループ設定方法は、生徒の座席を画一的に、無作為に組織したものであった。このような設定方法では、グ

グループワークを行っても、活動型学習に苦手意識をもつ生徒や、自分の意見をうまく表現できない生徒が存在し、活発に議論を進められたグループとそうでないグループとが存在した。

今回の学習では、協働的な学びに貢献的な生徒の手によって、タスクを達成することができた。生徒の思考力、判断力、表現力等をより高い次元に導くためには、生徒の人間関係や、知識の定着度等の要素を考慮に入れて、グループ設定を行う必要があると考える。

(参考資料) 本時に応用したルーブリック評価表

身に 付けさせたい力	達成度	レベルA	レベルB 【履修目標】	レベルC	レベルD 【到達目標】	レベルE
現状を分析し目的や課題を明らかにする力 ①		顧客のニーズに応えられる商品を選択し、選択理由を具体的な根拠に基づいて述べることができた。	顧客のニーズに応えられる商品を選択し、選択理由を具体的に述べることができた。	商品を選択し、選択理由を述べることができた。	商品を選択し、選択理由を述べることができたが、その内容が十分でない。	商品を選択し、たが、選択理由を述べることができない。
課題解決に向けて計画する力 ②		文化祭実習に向けての作業を、根拠に基づいて組み立てることができた。	文化祭実習に向けての作業を、具体的に組み立てることができた。	文化祭実習に向けての作業を、組み立てることができた。	文化祭実習に向けての作業を、組み立てたが、その内容が十分でない。	文化祭実習に向けての作業を、組み立てられない。
自分の意見をわかりやすく伝える力 ④		相手が理解を深めることを意識しながら、事例を挙げ、自分の意見を述べるができる。	相手が興味を引くように工夫しながら自分の意見を述べるができる。	相手が理解できるよう配慮し、自分の意見を述べるができる。	相手のことを意識して、自分の意見を述べるができる。	伝えたい内容を相手に伝えることができない。
相手の意見を丁寧に聞く力 ⑤		相手が振り返り、考えるための質問をすることができる。	相手の意見に即した質問をすることができる。	相手の意見を記録し整理することで、理解を深めようとするができる。	相手の意見を理解しようとしている。	相手の意見を理解しようとしていない。

(注) マーケティング用語の定義：実教出版「マーケティング」の教科書のさくいんに掲載されている用語とした。

実践事例Ⅳ

教科名	商業	科目名	マーケティング	学年	第2学年
-----	----	-----	---------	----	------

(1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

ア 単元名 第3章 市場調査

イ 使用教材 「新訂版 マーケティング」法令出版

(2) 単元（題材）の目標

- ・ 外国人観光客の増加という社会背景を踏まえて、「A区（市）に外国人観光客を呼ぼう」というコンセプトの中で市場調査を行う。
- ・ 情報の収集と分析を行い、仮説を立案し調査報告書（A区（市）観光ガイド新聞）を作成させる。
- ・ プレゼンテーションの手法を把握させ、グループワークや発表を通して自主的かつ主体的な姿勢を育む。

(3) 単元の評価規準

ア 知識・技術	イ 思考、判断、表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
① 市場調査方法における、基本的な知識が身に付けている。 ② 様々な情報がある中で、自身で本当に必要な情報を取捨選択し、選択する技術を身に付けている。	① 外国人観光客が多い社会背景の中、A区(市)への観光客誘致の視点で、魅力を考え発信する思考力をもっている。 ② グループ活動や発表を通じて相手に自分の意思を表現する力が身に付いている。	① 市場調査や仮説設定に関する知識と技術に興味をもち、学習しようとする意欲をもっている。 ② グループ学習において積極的にコミュニケーションを図り、意見交換や課題解決に向けた活動に意欲的に参加している。

(4) 単元(題材)の指導と評価の計画(5時間扱い)

時間	学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法など)
		ア	イ	ウ	
第1・2時	<ul style="list-style-type: none"> 「A区(市)と言えば何か」と聞かれた時に、どんなものが考えられるか。考えられる限りを挙げさせ、グループ活動を通しておすすめスポットの候補を挙げさせる。 		●	●	<ul style="list-style-type: none"> グループ活動を通して、自分の意思を表現している。(イ②グループワーク) グループ学習において積極的にコミュニケーションを図っているか。(ウ②意見交換)
第3時(本時)	<ul style="list-style-type: none"> 仮説の立案(A区(市)に外国人観光客を呼べるのか)に向けての探索的調査を行う。消費者行動やニーズが多様化している現状を把握させ、仮説を立案する。 	●	●	●	<ul style="list-style-type: none"> 市場調査方法における基本的な知識が身に付いている。(ア①発問) 様々な情報の中で取捨選択をし、必要な情報だけを選択する技術をもっている。(ア①ワーク) 市場調査や仮説設定に関する知識と技術に興味を持ち、学習しようとする意欲をもっている。(ウ①ワーク)
第4・5時	<ul style="list-style-type: none"> 調査報告書「A区(市)観光ガイド」を課し、現状の分析と観光客を呼ぶための仮説を個人でレポートに書き出す。 各個人で書き出した仮説と根拠をグループ間で検討し、最終的な課題解決のためのプロセスを計画する。 課題解決のために計画したプロセスを手順に従い調査報告書にまとめる。 各班でまとめた調査報告書を発表形式で表現する。 	●	●	●	<ul style="list-style-type: none"> 与えられた課題について積極的に考え、解決策を見付けるために調査し、論拠のある仮説を立てることができる。(ア②ワーク、イ①発問) グループで意見交換し、意見の共有、互いの考えを元に新しい発見を導き出すことができる。(イ②意見交換 ウ②会話) 仮説と根拠を基に、調査報告手順を計画することができる。(イ①課題、ウ①発表) 仮説結果をA区(市)観光ガイドにまとめ、仮説の立証、あるいは新たな仮説を立てることができる。(イ②発表、ウ②コミュニケーション)

(5) 本時(全5時間中の3時間目)

ア 本時の目標

- (ア) 探索的調査に関する知識を活用し、仮説の立案のための作業として重要であるということを理解させる。
- (イ) グループ活動を通してコミュニケーション能力を養い、意見交換の姿勢、効果的な意思の伝達について考え、実行する。

イ 仮説に基づく本時の狙い

- (ア) 授業の始業時にルーブリック評価表と自己評価表、相互評価表を提示し、本時の活動によって身に付けるべき知識・技術と望ましい学習態度を意識させ、効果的な学習活動を促す。

(イ) A区(市)への外国人観光客誘致をテーマとした調査報告書を完成させるためのグループワークを行うことにより、生徒の主体的、対話的で深い学びへと導き、知識・技術の定着と思考力、判断力、表現力等を養う。

ウ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入 10分	<p>本時の活動内容の説明</p> <ul style="list-style-type: none"> ループリック評価表、自己評価表、相互評価表の配布と説明 調査報告書の提示、説明「A区(市)に外国人観光客を呼ぶことはできるのか。」 	<ul style="list-style-type: none"> 到達目標を明確にし、生徒の学習活動の方向性を明確に示す。 単に、観光名所を挙げるのではなく、そこに集客するためにはどんな工夫が必要なのかを考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> A区(市)について関心をもって授業に取り組みようとしている。(ウ①意欲)
展開 30分	<ul style="list-style-type: none"> 探索的調査の手法について質問法の内容を確認する。その中で、各調査にどんな方法が適しているのかを考えさせ、仮説を立てる。 調査報告書作成に向けてA区(市)に外国人観光客が呼べるのかを立証させられるよう、情報収集をグループで行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 郵送法や面接法は今回の授業では適さないので、机間指導で助言をしながら電話法かWeb調査の方法を選ぶように促す。 外国人観光客が特に多い観光地を例に挙げ、A区(市)との違いを机間指導しながら生徒に考えさせる。決して答えることはしない。 	<ul style="list-style-type: none"> 与えられた課題に、自分の知識と他者との意見を取り入れ、積極的に作業に取り組んでいる。(ア①知識、イ①思考力) グループ内でコミュニケーションを積極的に図り、他者の意見を取り入れようとしている。(ウ②意欲)
まとめ 10分	<ul style="list-style-type: none"> 本時の授業を振り返り、自己評価表と相互評価表の記入を行う。 次回授業での調査報告書の作成方法について確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 各評価に関しては謙遜することなく、思った通りの評価を記入させるように指導を行う。 	

(6) 本時の振り返り

ア 仮説1の検証(ワークシート作成による検証)

授業内で市場調査の具体的な手法を学び、それを実際の題材を使い、表現することでより深い学びとなり、知識・技術の定着に結び付けることができた。また、複数ある市場調査方法を比較検討させ、生徒自身が調べる内容と、その方法を生徒に考えさせる時間を多く与えられた。そして、発表活動を通し、人とのコミュニケーションに対する意識が自然に生まれ、よりよい発表をしようとするための力が育まれたといえる。

イ 仮説2の検証(グループワーク・発表・相互評価表による検証)

知識を詰め込むだけの一方通行的な授業展開だけでなく、アクティブラーニングの要素を取り入れることによって、生徒同士で考え、判断し、表現しようとする積極的な姿勢がみられた。生徒が学習したマーケティングの用語や今回の市場調査の手法などを実際に扱うことで、生徒に実用的な知識として定着させることができた。さらに、無作為に抽出してグループを構成した結果、進行役、まとめ役、発表役などの役割分担を生徒自身が考え、不得意な分野でも挑戦する姿勢が見られた。これは、生徒の新たな一面をグループ活動によって引き出せたと言える。また、授業の冒頭に單元ごとのループリック評価表を提示することにより、評価に対する意識が芽生えた。生徒は、評価規準という目に見えなかったものを評価表の提示により可視化され、相互評価で指摘されたことを次の授業で改善しようとする姿勢が見られた。

ウ 仮説3の検証

活動型の授業を展開することにより、生徒の自主的な活動を促すことができた。グループ

活動を通し、生徒間に自然と会話が生まれ、生徒たち自身がよりよい調査報告書を作ろうと案を出し合う姿がみられた。活動型授業を毎時間の全体で行うことは難しい。しかし、問題演習の際に小グループを作成し、課題が終了した生徒は、グループ内の他生徒に教える「教え合い」の場などを設けることにより、簡単に活動型の授業を作ることができる。教える生徒もどう説明すれば他者が理解してくれるのか。「相手の立場に立って」ということが社会に出るうえでとても大切なことだと考える。したがって、授業方法を改善することによって生徒の学習意欲を高めることは十分可能であるということがいえる。そして、「マーケティング」において、今まで学習してきた知識を活用して、グループ内でのコミュニケーションを通して、他者理解・相互扶助など、必要な情報を取捨選択し表現するなど、新しい時代を生き抜くための学力を十分に身に付けられると考える。

エ 課題

この授業を通して、課題が浮き彫りとなった。クラス単位で授業を行い、授業改善によって得られる効果を検証してきたが、大人数のグループワークとなると授業者一人では指導が行き届かない部分があった。各グループに対し、均一に机間指導を予定していたのだが、最初の授業はどうしても特定のグループに指導が偏ってしまい、声を掛けられないグループもあった。しかし、生徒にヒントだけを与え、残りは自分たちで考えさせる。このことによって、生徒は、グループオリジナルの解釈の方法ですばらしい作品が完成した。

今後、このような活動型授業を展開する際には、導入の部分に重きを置き、しっかりとグループ活動を支える必要があると考える。

評価に関しては、クラス単位で行う際には、一度に多くの評価をしようとせず、授業回数に分けて生徒たちを見ていくべきである。一度に複数の評価をしようとしがちであるが、それは無理がある。生徒は、ルーブリック評価表を初回授業時に見ており、どこを目指せばいいのかが分かっている。授業者が生徒一人一人を見ていくためにも、評価規準を絞り、適宜、机間指導を行うことが大切である。

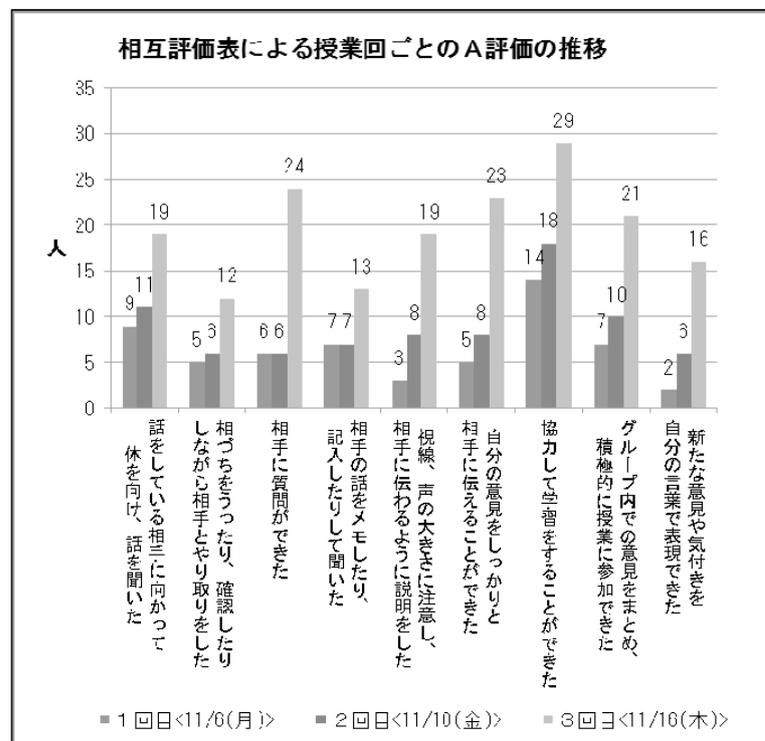


図4 相互評価表のA評価推移 (A評価・・・よくできた)

(参考資料) 本時に応用したルーブリック評価表

身に 付けさせたい力	達成度	レベルA	レベルB 【履修目標】	レベルC	レベルD 【到達目標】	レベルE
新しい価値を 生み出す力 ③		自ら新たな視点でのA区(市)の魅力を提案できる。	自ら根拠に基づいたA区(市)の魅力を提案できる。	自ら指示された範囲のA区(市)の魅力を提案できる。	他人のアドバイスがあれば指示された範囲のA区(市)の魅力を提案できる。	指示された範囲のA区(市)の魅力を提案できない。
自分の意見を 分かりやすく 伝える力 ④		相手の理解を深めながら、具体的な事例等を挙げ、自分の意見を積極的に述べることができる。	相手が興味を引くように工夫しながら自分の意見を述べるができる。	相手が理解できるように配慮し、自分の意見を述べるができる。	相手のことを意識して、自分の意見を述べるができる。	伝えたい内容を相手に伝えることができない。
相手の意見を 丁寧に聞く力 ⑤		相手が振り返り、考えるための質問をすることができる。	相手の意見に則した質問をすることができる。	相手の意見を記録し整理することで、理解を深めようとするができる。	相手の意見を理解しようとしている。	相手の意見を理解しようとしていない。

VI 研究の成果

これまで、アクティブ・ラーニングの視点に基づいた授業改善が実践されてきているが、商業科においては、検定試験対策への取組がより重視され、検定試験に合格させることがそれぞれの科目の目標となり、知識や技術を習得させても、それらを発展・応用させる授業展開をすることはあまりしてこなかった。

本研究では、これまでに学習してきた知識や技術を活用したアクティブ・ラーニングの視点に基づき、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた、課題解決型の学習を行うことが、新しい時代に求められる思考力、判断力、表現力等を育むことにつながると考えた。そして、レポートやプレゼンテーションなどのパフォーマンス課題やグループワークを通じた協働的な学習を取り入れて授業を実践した。

各実践では、それぞれ知識や技術の定着に加え、協働的で活動的な学習を実施し、思考力、判断力、表現力等を高めるための工夫に満ちた授業改善を行い、新しい時代を生き抜くための学力を身に付けさせることができたといえる。

また、昨年度の商業部会が提案した「共通のルーブリック評価表」を、それぞれの授業者が目的に合った形に変えて生徒に提示し、生徒自身が到達目標を意識しながら授業に参加したり、アンケートや自己評価、相互評価を通じて、自らの達成度を確認したりすることで、生徒の学習意欲を引き出し、自発的な学習を促すことができた。

さらに、学習成果に関しても、授業前と授業後との比較から、小テストの結果やワークシートに記述されている内容から、これらの授業改善が有効であることが検証され、学習した知識や技術を活用する授業を取り入れることにより、思考力、判断力、表現力等を育みながら、知識の定着や関連した学習内容の達成を果たすことができた。

VII 今後の課題

本研究のメンバーが行った授業の多くは、選択科目や習熟度別授業などの少人数による授業で行ったもので、各生徒に指導が行き届き、生徒個々の活動を把握しながら行うことができた。仮に、クラスを単位として授業を行った場合に、同様の学習成果が得られるかどうかは定かではない。評価すべき対象人数やグループが増えることによって、授業者が個々の生徒の活動を把握しづらくなり、きめ細かな評価ができなくなったり、設定すべき評価規準を絞らざるを得なくなったりする可能性がある。

また、協働的な学習におけるグループ設定も、授業者が無作為に行うことが多く、生徒の学び合いの観点から見て、知識の定着度や生徒間の人間関係を考慮した意図的なグループ設定が必要だと思われる。設定したグループの展開方法についても、授業計画の中で、入念に組み込んでいく必要がある。

さらに、それぞれの科目の特性を踏まえ、講義型授業と活動型授業を取り入れる配分量や組み合わせ方法については、まだまだ研究を深めていく必要がある。

都立の商業高校では、次年度に商業科からビジネス科に学科改編され、補助教材「東京のビジネス」の活用や学校設定科目「ビジネスアイデア」の授業が本格的に始まり、各学校でアクティブ・ラーニングの視点に基づいた授業が展開される。今回の商業高校に対する改革を成功に導くためには、各教員が教材研究を精選し、新しい教授法を積極的に取り入れた、工夫に満ちた授業を展開していかなければならない。

時代は常に変化し続けている。都立の商業科教員の一人として、新しいビジネス学習の創造に取り組んでいきたい。

平成 29 年度 教育研究員名簿

高等学校・商業

学 校 名	職 名	氏 名
東京都立荒川商業高等学校	主幹教諭	◎ 智片 将也
東京都立芝商業高等学校	教 諭	友村 由衣
東京都立第一商業高等学校	教 諭	坂本 由季
東京都立第四商業高等学校	教 諭	松井田 隆宏

◎ 世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部高等学校教育指導課
指導主事 飯畑 秀樹

平成 29 年度

教育研究員研究報告書

高等学校・商業

東京都教育委員会印刷物登録

平成 29 年度第 142 号

平成 30 年 3 月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電話番号 (03) 5320-6849
印刷会社 康印刷株式会社